

## とみおかアーカイブミュージアム・福島第一原発廃炉作業の見学会を実施

東日本大震災から13年を迎え、2019年から毎年実施している福島第一原発廃炉作業見学会を5月24日(金)に実施をしました。昨年まではコロナ禍で見学人数が制限されていましたが、制限が解除され、会員生協の役職員、組合員、総代の25名が参加されました。

今回は、とみおかアーカイブミュージアム見学も行程に加え、地震・津波、また福島第一原発水素爆発発生後の富岡町の状況が展示されている資料館見学、被災者の証言映像などを視聴しました。

その後、バスで東京電力廃炉資料館に移動して福島第一廃炉推進カンパニーの職員の方から見学の諸注意を聞いた後、廃炉作業と福島復興の進捗動画を視聴し専用バスで福島第一原発へ移動しました。廃炉作業をすすめる1号～4号機の原子炉建屋から約100メートルの見学用丘から作業状況の説明を受けました。空間線量は風向きで変動しますが福島第一原発構内入口からは高くなり30～60 $\mu$ Sv/hまで引き上がります。長時間滞在はできず15分程度の説明・見学の時間でした。2号機でデブリ取り出しが成功しましたが、瓦礫が蓄積している1号機構内からの取り出しは方法も含めて時間がかかっています。

また、昨年8月から開始されているALPS処理水海洋放出のためのALPS処理水希釈放出設備の見学・説明を受けました。WHO飲料水に含まれるトリチウムガイドラインでは1万ベクレル/Lですが、福島第一原発の海洋放出では1500ベクレル/Lと決められており、現在は250ベクレル/Lとなっているとのことでした。安全の確保、安心の醸成に向けて国民の理解が深まるよう情報提供や広報のあり方について、国と東京電力には最大限の努力が求められています。

すでに国道沿いに積まれていた汚染土は中間貯蔵施設に移されて、除染作業がすすんで帰還困難区域解除が広がっています。空間線量も下がり、新たに建物や家が建てられ変化がすすんでいます。未だ2万人以上の人たちが避難生活を送っており、自分の生まれ育った福島に戻り、仕事と生活が出来るようになるまでには多くの時間がかかりそうです。

隣県に暮らし、東海第二原発を持つ私たちは、福島が出来事や福島の人たちの想いを忘れることなく寄り添い続け、日本の進むべきエネルギー政策について考えていけたらと思います。

### 【参加者の感想(一部)】

- 「脱原発を望むので再生可能エネルギーが日本国内のエネルギー供給を満たしていけることを希望します。地球温暖化を防止するためにも火力発電も抑えたいし、今日視察しビデオを見てさらに強く思った原子力発電の事故を起こした時のおそろしさを二度とこの世界に起こしてほしくないです」
- 「原発はエネルギー源としての有用性より、万が一の事故の時のリスクの方がずっと大きいと思う。また日本のエネルギーに占める割合は高くなく、原発に頼らないエネルギー政策に転換すべきだ思う」  
「機内のデブリを冷却させること、汚染水対策について内容は難しいです。課題は山積みですが日々東電として英知、技術力、人員を注ぎフル稼働していることが目で見てわかりました」
- 「2050年過ぎるまでずっと続く作業。どうか二度と甚大な危険なく進めていけますように願っています」  
「テレビや雑誌で見たり読んだりするより実際に現地に行き学習し周りの方々にお知らせしたいです。住民の苦しみ!」
- 「ニュース、報道番組などで関心はあったが、実際にどのような状態になっているのか、作業がどう進んでいるのかはよくわからなかった。今回自分の目で見、話を聞き、作業に当たっている方々の努力を感

じることができた」

○「原発でふるさとを離れざるを得なければならなかつた人々、帰るに帰れない人たちを思い、特に子供たちの心の痛みを思うとやるせない気持ちです。今日参加できて良かったです。一人でも多くの人に見てもらいたいと思いました」

### ■とみおかアーカイブミュージアム



当時の避難所再現



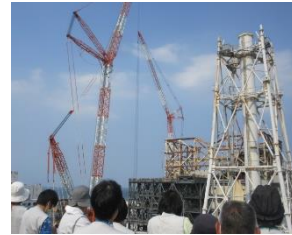
### ■東京電力福島廃炉資料館・福島原発構内



福島第一原発1号機



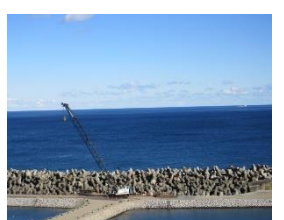
福島第一原発2号機



見学の丘の線量計



ALPS 処理水貯蔵タンク



1km 先海底から放出